

報告番号	※乙	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 情報体の哲学
 — 二元論再考の視点からみた
 サイバースペースにおける知の創造

氏 名 曾我 千亜紀

論 文 内 容 の 要 旨

本論で展開したのは、端的に言えば、デカルト哲学と情報社会論の融合である。17世紀の近代哲学者と、非常に現代的な視点とを結びつけることは容易ではない。情報社会論の思想的側面に詳しい人々は、ネットワークを論じるために有用なのはデカルトよりもむしろ『モノドロジー』を著したライプニッツや、現代のポストモダン思想ではないのかと問いたくなるであろう。しかしここでは敢えて、二元論の祖とも言われるデカルトを基盤に置き、これまでの彼の二元論についての理解が一面的であることを指摘した上で、二元論の新たな側面 — これこそが二元論を主張するために最も重要な側面を担うと私は考えるのだが — について論じた。二元論の最も重要な点とはすなわち、二項（デカルトで言えばそれは精神と身体として現れる）の区別と合一を両立させるということである。分けることと合わせることを同時に成立させることなど不可能なように思われたりもしよう。だが、その不可能に思われる側面を、私たちの認識の枠組みに即して語ろうとしたのがデカルトであった。

デカルト哲学と情報学というこの二つの領域は別々のようでありながら、深く関わっている。情報学を論ずることによって、デカルト哲学を新たに見直すことにもなり、デカルトに由来する概念をより動的に捉えることができた。翻って、デカルト哲学の動的な理解を、社会情報学における各主題の展開に反映させることも可能となった。それによって、精神と身体、情報と主体、私と他者、個と集合といった哲学的でも社会的でもある主題について、一つの解釈の形を、あるいは一つの倫理的な形を提起した。

私はここで、情報体という新たな概念を提起した。出発点となっているのはまさにデカルトの二元論である。精神と身体とは別々の存在として区別されるが、それらは合一して働く。情報体は区別と合一といういわば矛盾した場面をまとめ上げる一つの概念である。たとえば情報と主体の問題（すなわち情報とその担い手をどのように区別するか、両者をどのように融合させるかといった問題）や、個と集合の問題（個々の存在を結びつけ集合へと至らせること、しかも集合に埋没しない個を保つことは可能かといった問題）などが、情報体という概念を通して捉え直されたとき、情報学の領域内に新たな視点が生成するのである。

本論では、現代の具体的な問題や実践的場面にその都度目配りはしたが、個々の事例を解決することを目的とはしなかった。むしろ、様々な事例の背後に共通して横たわる視点や考え方を顕在化させることでそうした事例そのものを問題化し、今現に起こっている問題だけでなく、今後起こりうる問題や現時点では想定されえない問題にも対処しうるような柔軟な思想を提供することを目指した。その意味において本研究は、情報工学や情報科学分野における実践的研究と相補的である。情報論の理論的側面という一面を担うのが本論の役割である。今後、本研究と実践的研究とが融合し、両者を合わせて捉えることによって、情報学の新たな様相へと移行することができよう。それこそがまさに、二項の区別と合一の実現である。

本論は四部から構成されており、各部は二つの章から成っている。

第一部では、デカルトの二元論を取り上げ、普通は同じレベルで捉えることを断念される心身の区別と合一の両立がどのような意味で可能となるかを論じた。デカルトの二元論は単なる二項対立を主張するものではない。二項の区別と合一の両立、すなわち精神と身体との区別と合一を両立させることによって、二元論の新たな可能性が拓かれるのである。とりわけ、新たな情報を生み出す際に、精神と身体がどのような秩序に則して、どのように機能するかを考察した。ここで提起された情報体という概念は、第二部以降の各主題において、重要な役割を果たす。

第二部以降、情報体が具体的にどのような場面で関わってくるのかを、情報思想の重要なテーマに従って考察していった。すなわち、心身問題に留まらない二項の区別と両立を問題とした。第二部では情報と主体を主題として取り上げた。情報とは何か、知とは何か、それを担う主体とは何かという問いを立てたのである。情報や知、主体についての一般的理解が、考察を進めていくにつれて徐々に変容していく。最終的に、情報や知と主体とをまとめ上げる存在 — 情報体 — という概念を導入することによって、個々の存在がネットワークへと到達しうる途を拓くことを示した。ここで、知や情報とその担い手である主体とは、情報体という概念を通して、それぞれが一つの持続する存在でありながら、同時にある種のエネルギーであり力であることが明らかになる。知や主体にまつわる固定的な印象、実体的なイメージは、知と主体の関わりそれ自体が情報体であるという考察によって、より動的なものに変わった。

第三部では、情報表現と解釈が主題となった。情報の価値づけ（それをリアリティの問題として捉え直す）とハイパーテキストに注目した。ここでは、情報と関わる際、有用性や有効性といった側面だけではなく、創造性や独創性といった価値観もまた重要となることが示された。情報を解釈したり表現したりする際の、一つの理想的な形が語られたのである。とりわけ、情報の一つの価値としてのリアリティと、より具体的な展開としてのハイパーテキストのレクチュールとエクリチュールが扱われたが、これらもまた、柔軟性を持つ概念であることが明らかにされた。サイバースペースをめぐる情報は、何らかの主体が解釈することによって、情報体として成立し、意味づけや価値づけが為される。ただし、そのような図式は一方向的ではない。テキストを介して読み手と書き手が入れ替わったり、読み手とも書き手ともなりうる主体の間を、変容しながら情報が循環していく。この関係を表しているものが情報体という概念であった。

第四部では、サイバースペースにおける他者との関係の構築が問題となった。ここではとりわけ、情報倫理的視点から思考が進められた。私は敢えて肯定的で楽観的な論じ方をした。集合における一つのあり方、しかもある種の理想を標榜する倫理的あり方を提起したのである。情報倫

理の新たな可能性を拓くには、そのような論じ方において他にはないと考えるからである。私と他者の区別と合一、個と集合の区別と合一を両立させる情報体は、ポリフォニックなサイバースペースを形成する。多層的で多様な価値観を併せ持つ豊かな世界を切り拓く可能性が、情報体という概念を通して示された。

本論を貫いているのは、デカルト思想と情報体である。一挙にネットワークへと繋ぐ思考ではなく、段階を追って広げていく方途、すなわち、個から集合へ、個別の情報からサイバースペース全体を覆うテキストへ、段階を追って積み上げる方法自体をデカルトに倣っている。そこにおいて、情報体という新たな概念が重要な役割を果たす。区別と合一を併せ持つこの概念を導入することによって、情報論の様々な場面で（あるいは個から集合へ、個別の情報からテキスト全体へと射程を広げていく際に）、多層的で多義的な世界が広がっていることを示すことができた。

たしかに情報体という概念は、捉えるのが容易ではない。そもそも、分けながら合一させるという試みは矛盾としか思われぬ。しかし、一見、固定的で閉じた理解に留まる怖れのあるデカルトに由来する主体や客体を、集合体やネットワークへと結びつけうるものとして捉え直すことができたのは、柔軟性のある情報体概念のおかげである。この広い射程を持つ概念は、今後の社会情報学の研究においても、大きな示唆を与えてくれるであろう。

本論を通して得た最も大きな収穫は、情報体という概念を様々なレベルや側面において展開しうる可能性に気づいたことである。今後は、まさに書きながら生まれた情報体概念を、実際的な研究と関連させて、たとえば情報工学や情報科学との共同研究へと結びつけることができれば幸いである。社会情報学の実践面に触れることによって、情報体概念もさらに彫琢され、深まっていくに違いない。